

風に聴け

大森海太

近ごろ電車に乗っていて気がつくのは、まわりの乗客がみんな私より若くて、八十過ぎなど殆どいないということだ。完全にマイノリティである。

さて、この乗客の多くがスマホに見入っている。このまえなど向かいの席の七人が全員スマホという奇観を呈しており、降りぎわにのぞいてみると、ネットやラインのほかゲームに夢中の奴もいる。あんな狭い車両の中で大量の無線電波が飛び交っているということは、全く理解を超えている。

また散歩をしているときなど、向こうからやってくるオバサンが歩きスマホで、危うくぶつかりそうになることがある。

私は歩くのが趣味で、散歩をしながらあたりの景色を見てまわるのが嬉しい。

都心でも近くの神社や寺や公園、あるいは普通の家の塀越しにも、木々の緑や花のたたくまいから季節の移ろいを実感する。

電車に乗ってもスマホなど見ていないで、窓の外を眺めるほうが面白い。見慣れた風景でもその日によってなにか新鮮に感じる（その点、地下鉄はつまらない）。

私が外を歩くのは、たんにその辺の景色を見るためだけじゃない。その日その場所で草木の葉音や鳥たちのさえずりを聞き、空気のおいを嗅ぎ、からだ全体であたりの雰囲気と一体となることを実感するのだ。

この気分を表現するのに開高健のエッセイのタイトル『風に訊け』を無断借用した（コメントサイ）。

その点からすると先ほどの歩きスマホは論外として、耳にイヤフォンをつけたまま散歩している連中もどうかと思う。

さらに言えばこれからはAIの時代だ。わざわざ外歩きなどしなくても、画面その他の精巧な仕掛けで自然を実感できるようになるのだろう。eスポーツとやらもその流れかもしれない。皆がエアコンの効いた部屋でリラックスしながら好きな仮想空間を愉しむ、そのような世の中が来るのかも。

でもオレはいやだね。メカに弱いし、AIが故障したらどうするのだ。

そんなことよりこの足で外に出て、本物の空気を吸いたい。風に聴きたい。